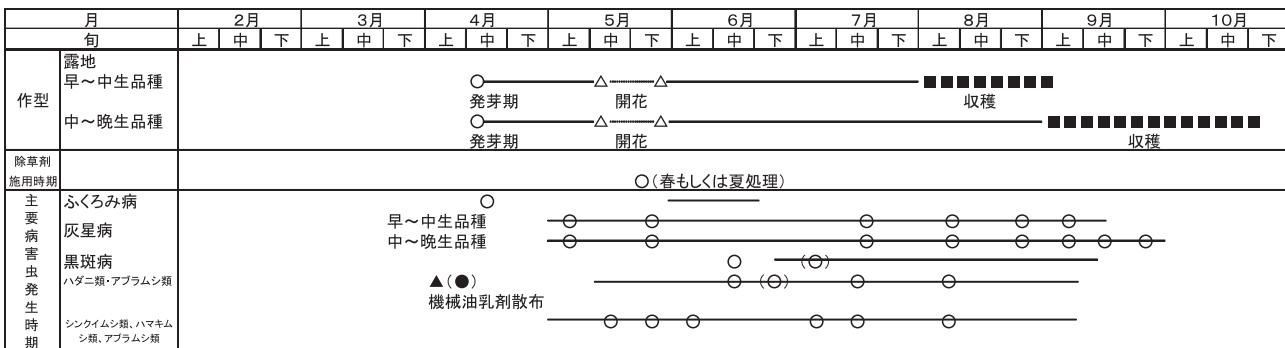


63 おうとう

A 栽培管理カレンダー



【凡例】作型図 ○発芽、△開花、■■■■■収穫、▲その他栽培管理法等
主要病害虫発生時期図：——発生時期、○基幹防除時期（〇）臨機防除時期、▲発生状況調査等（〇内数字は成分数）

⑤同時防除(同一薬剤で複数の病害虫を対象) (◆)条件付き防除

注)各作物の旬は道央地帯を主としているので、道南、道東北地帯は前後する。

B 主なクリーン農業技術の概要

(1) 土づくり

- 基盤整備
 - ・排水対策の実施
 - 有機物の施用
 - ・たい肥（2 t／10a）施用を基本とした土づくり
 - ・草生栽培を基本とした土壤管理

(2) 施肥管理

- 土壤診断による施肥の適正化
 - ・土壤診断を行い、その結果を活用した適正施肥
 - 有機物の肥料評価による施肥の適正化
 - ・有機物由来窒素の評価による施肥窒素削減

(3) 雜草の防除

- #### ○機械除草の併用

(4) 病害虫の防除

- 発生モニタリングによる効率的防除
 - ・圃場観察による発生モニタリングで適期防除
 - 化学的防除の効率化
 - ・休眠期の機械油乳剤散布によるリンゴハダニの越冬卵、カイガラムシ類の越冬雌成虫の削減
 - ・交信攪乱剤利用によるコスカシバの発生密度低減
 - 物理的防除
 - ・灰星病対策として、雨よけハウスの導入による裂果防止
 - 生物的防除
 - ・灰星病対策として、バチルスズブチリス剤の利用
 - 耕種的防除
 - ・被害果・被害葉の摘み取り除去
 - ・融雪後の速やかな園地内の乾燥
 - ・カイガラムシ発生圃場では、休眠期にブラシ等で除去

(5) 植物成長調整剤の使用

但構成式語
使用しない

C 裁境に当たつての留意事項

- 樹冠内部にも十分日光が入る防除効率の良い樹形管理を行うこと。

- 適正樹勢、適正着果、受光環境の改善で、健全な樹体づくりを行うこと。
- 降雨、湿潤条件で多発する病害が多いため、天候に対応した防除間隔・防除薬剤を選択すること。
- 灰星病の耐性菌出現防止対策として、系統の異なる薬剤のローテーション散布を行うこと。
(耐性菌情報については、北海道農作物病害虫・雑草防除ガイドを参照)

D 栽培に当たっての禁止事項

なし

E 肥料及び化学肥料の使用基準

分類	慣行		使用基準		
	化学肥料施用量 (kg/10a)	総窒素施用量 (上限値、kg/10a)	たい肥等施用量 (下限値、t/10a)	化学肥料施用量 (上限値、kg/10a)	
露地	14.0	12.0	2.0	10.0	

- 注1 有機物施用は当該年ではなく、翌年の施肥量に積算する。
- 注2 たい肥1t当たり1kgの窒素換算量とする。ここでのたい肥とは、「牛ふん麦稈たい肥」、「牛ふん敷料たい肥」を指す。
- 注3 たい肥等施用量下限値は、たい肥に相当する有機物での対応も認めるものとする。
- 注4 たい肥施用量は数年間（3～5年程度）の平均値も認めることとする。

F 化学合成農薬の使用基準

(単位：成分使用回数)

作型	慣行							使用基準										
	殺菌剤 (種子消毒)	殺虫剤	殺虫・殺菌剤	除草剤	植調剤	計	殺菌剤		殺虫剤		除草剤		植調剤		計			
							基幹 (種子消毒)	臨機	基幹	臨機	基幹	臨機	基幹	臨機	基幹	臨機	合計	
露地	8	-	8	2	2	0	20	6	-	2	6	1	1	0	0	13	3	16

- 注1 使用基準は剤別（殺菌剤・殺虫剤・除草剤・植物成長調整剤）及び基幹・臨機防除別に記載
基幹防除：平均的な病害虫の発生状態を考慮した場合、ほぼ毎年行う必要がある防除
臨機防除：突発的な病害虫の発生や、地域や品種により発生状態が異なる病害虫に対して行う防除
- 注2 種子消毒は殺菌剤の内数とする。
- 注3 生産集団の栽培基準における化学合成農薬の使用回数は、使用基準の合計回数を下回るものとする。
- 注4 使用基準における化学合成農薬の剤別の使用回数は、地域の栽培実態に合わせ変動して差し支えない。

G 注釈

●土壤診断の実施

窒素の分析は義務化しないが、的確な施肥を行うため実施に努める。

●交信攪乱剤利用によるコスカシバの発生密度低減

チュウリトルア剤を成虫発生期に使用

交信攪乱効果を得るには広域での使用が原則であるが、使用本数を増やせば20a程度の小面積でも効果が期待できる。3ha以上の広域施用なら10a当たり50本の製剤を1.5m～2mの高さの枝に施用する。小面積の場合は施用本数を150本まで増やす。施用区域の周縁部や傾斜地の上部には本数を増やし、中央部では減らすなどメリハリの利いた使用をする。